

明治初期露西亞文学論攷（五）

マーシヤがマリーになる事情（高須治助の「大尉の娘」翻訳の頃）

加藤 百合

一、「露国奇聞 花心蝶思録」（露国情史 スミス、マリー之伝）

二葉亭四迷のツルゲーネフ翻訳によって日本人の目がロシア文学に開かれたということは異論がないところであろう。しかし、最初にロシア語の文学作品を翻訳紹介した功績は、プーシキンの「大尉の娘」の訳者高須治助に帰せられる。

「大尉の娘」が、プーシキンの円熟期の代表的散文であり、プガチョフの乱に取材し実在の人物貴族シヴァンヴィッチを主人公にして書かれた歴史小説であり、プーシキンが皇帝の伝記等を書くため文書館に出入りできた特権を利用して史料を蒐集し、まず膨大な「プガチョフ伝」を書き、そののちそれを小説化したものであることは知られる。

高須の訳は「露国奇聞 花心蝶思録」の題で明治十六年、法本書屋から出版された¹⁾。東洋におけるプーシキン紹介の一番早いものである。挿し絵は月岡芳年²⁾が描いた。

遙かな東洋で出た翻訳について、本国ロシアでいち早く紹介されているのが興味深い。

一八八二年（筆者註一八八三年の誤り）東京の本市場に、プーシキン「大尉の娘」の精密な日本語訳が、しかも美しい挿絵入りでお目見得しようとは、ロシア人側の予測だにできなかったことであった。しかしそれらは何という挿絵だったろう！（『Zivya』 1910, no 29, p.519-520）³⁾

この記事が、エカチェリーナ女帝の「まるで日本娘そのものの細い目」などの表現で挿し絵を囁う点に集中しており、本文および題詞について言及されていないのは、当時ロシアには日本語を読める研究者がいなかったためであった⁴⁾。

ところで、高須の訳はこれまで日本国内でも詳細な検討や評価の対象にされてこなかった。それはこの訳が、量的にプーシキンの作品の六分の一（現行の岩波文庫版の完訳で約十六万字に対し約二万五千字）というかなりの抄訳である、というばかりではない。明治十九年に本文はそのまま「露国情史 スミス・マリー之伝」（高崎書房）と改題出版されたことに端的にあらわれるように、「マリア」を「マリー」と、「ピョートル アンドレーヴィチ グリニョ

ーフ」を「ジョン スミス」等と主人公達の名前を英語名に変えているため、英語からの重訳であると長く信じられたからであろう。量的に可成りの省略のある抄訳であるから、英訳からか露文オリジナルからか、訳文から判定するのは難しい。英訳を参照した可能性は無論否定できない。一八八三年までには英訳は七種類出ているが、そのうち一八七七年のシカゴ版「Marie, a story of Russian Love」とは表題が酷似している。改題に際してシカゴ版の影響があったことは考えられよう。しかし翻訳底本については、柳田泉が『内務省版權書目』二五卷（筆者未確認）に一八六九年版プーシキン全集第四卷、ペテルブルグ、ベゾブラゾヴ・イサコフ社版が底本だと明記されているのを発見し、確定された。

高須治助の消息は早く失われたが、一九二八（昭和三年）『愛書趣味』で柳田泉が探索を始めてから同人が日本で最も早い時期にロシア語を学んだ者の一人であることがわかってきた。

講談社『日本近代文学大事典』には

安政六／一一／二二—明治四二／三／？（1859-1909）翻訳家。

江戸下谷生れ。治輔とも書く。別号は墨補、五湖（散人）。秋田藩江戸定詰め^{（1）}の武士富岡英之助の次男。蘭医高須保の養子となる。養父のすすめで東京外国語露国科に入ったが明治一三年中退。大蔵省の翻訳課に勤務。（略）のち長崎税関に赴任（略）。晩年は静岡の露国俘虜収容所勤務、露国大使館つき武官の日本語教師などをしていた。

とある。東京外国語学校は開設したてで彼は一期入学であり、言っ

てみれば日本で初めてロシア語を学んだ少数のひとりであった。後に二葉亭とともに坪内逍遙と交渉しロシア文学の影響の濃い作品（ツルゲーネフの「初恋」と同名の「初恋」や、カラムジンの「あわれなりーザ」を踏まえたと思われる「薄命の鈴子」など。彼の創作課程についても興味深い。）を書いた嵯峨之屋おむろ（本名矢崎鎮四郎）は同じく明治九年、第一期の露語科入学生であるからこれと同期にあたる。（二葉亭は明治十四年入学であるから在学時期は重ならない。）

長崎在任期間に個人編纂の日本最初の露和字典『露和袖珍字彙』（明治一九・七、丸善）を刊行した。『学の燈』（丸善）の第七号に『露和袖珍字彙』が広告され、そこには次のように謳われていた。

右ハ本邦始メテ露和通信講義ヲ唱ヘタル最モ露語ニ通曉ナル高須治助君ガ多年蛩雪ノ勞ヲ積ミツツ彼ノ有名ノ「ツユコヴノ、スラヴォン」字典ヲ抄訳シタルモノナリ其ノ訳字ノ適切辞義ノ明確ナルハ論ヲ俟ザルナリ世ノ魯学ニ志ス士座右欠ク可カラザル無二ノ珍典ト云フベシ

高須訳「大尉の娘」は、抄訳、翻案、筋書き、と様々な名で呼ばれる。全体の量が先に述べたとおり明らかに大きく減っている。逆に、例えば冒頭

山脈蟠蜿方里二亘り林樹蔚蔚幽谷二連り蕪々タル荒原アリト雖ドモ荆棘、地ニ蔓シテ纒カニ樵蹊ヲ通ジ狐狸ノ居ル處、豺狼ノ叫ブ處此ハ是レ露国ノ北部即チシビリヤ地方ノ一村^{（2）}落ニシテ：

は原作にはないものである。しかし、高須自身は序文に

我が訳ハ専ラ原書之意ヲ存シ敢テ濫リニ加削セズ又敢テ粉飾ヲ加ヘズ

と言っている。確かに、単に全体をあらあらと訳したものではない。訳出された部分は科白も含めてかなり忠実詳細なものであり、語学力は確かながうかがえる。

高須治助が「大尉の娘」を訳した方針はどういうものであったか。同じ序文に

方今蟹行ノ書ヲ訳ス者多ク而モ情史ノ類甚ダ希レナリ。特ニ露国情史ノ如キハ絶テ見ザル所也。亦以テ聊カ憾ミヲ為ス。

とあることに注目しよう。

ここで高須は、ロシア文学紹介の際「情史」すなわち恋愛小説が不当に無視されてきた、そこでロシアにも、人情あり、情史あり、ということを知らしめるために訳した、と強調しているように思われる。これ自体は、虚無党もののみが訳された此の時代にして非常に面白い観点であると思う⁽⁸⁾。問題は「大尉の娘」が単なる恋愛小説という以外の面を多分に持っている点に係る。

もともと「大尉の娘」は神西清が記すように、「……プランがその後しだいに変わって行って、単一の主人公がついにはグリニョフとシヴァーリンの二人に分裂すると同時に、小説自体も今日われわれ

の見るごとく、プガチョーフの乱を背景とする歴史小説的な面と、二つの家族の生活記録的な面とをなймаぜた、渾然たる融合体」を書いたものとなった（岩波文庫解説）作品である。それを踏まえたうえで高須訳を詳細に見ていくと、その前者を注意深く惜しみなく切り捨て、後者だけを忠実に拾ってつじつまを合わせたもの（つじつまを合わせるために「却説ク」と説明を加えた部分も少しある。）と見ることができるのである。

章割などは原作を忠実に踏襲しようとしている。ただ、第九章は、プガチョーフに占領された要塞から助けを求めに行く途中、おいかけてきた兵卒とのとりひきが量的に大部分なので、其処を切ると残りは少ない。そこで二章を合わせて一章として、後章の見出しは小見出しのように挿入されている。云ってみれば誰だったか、「戦争と平和」の「平和」の部分だけを拾い読みした」と言ったが、そういう訳し方であるといえる。

プガチョーフの乱については「皇帝の僭称者による反乱」がおこったことが、スミスからマリーを引き離した原因として示されているだけで、異民族（バシキール人）の叛乱、叛乱の処刑として耳鼻を殺がれ舌を抜いて木切れを入られた異民族の描写などの残酷性、叛乱を起こしたプガチョーフ自身が、此の謀反に加わった手下が「負け戦になったら自分のクビであがなおうとする連中である」ことを知っているところ、他の要塞のロシア人が、同胞の危機を知らされながら火中の栗を拾うための出陣をしようとしないうところなどは省いてある。

また、いわゆる「ロシア気質」、たとえば、従僕サヴェリエーヴイチ（高須訳ではクリントン）の、愚痴っぽく図々しく、それでい

て主人おもいのところ、辺境部隊の將軍の夫人ヴァシリサ エゴ
 ーロヴナ(高須訳ではジャンヌ)が「軍務のことを、家事も同然に
 考えていて、自分の家と同様にきちんと要塞内を切り回して」おり、
 一方將軍は普段すっかり細君に首根っこを捕まれているけれど、い
 よいよ絞首台の前に引き出されたとき断固其の素朴な口調を変えず
 皇帝と一蓮托生してしまうところ、さんざん賭博や酒をつき合わせ
 た悪友が激戦のさなか再会すると顔馴染みとして自分の命を賭けて
 とことん助けしてくれるところ、等々⁹⁾を取り除いてあり、それぞれ
 の行動の動機としては、純愛、親孝行、立志、忠義、恩返し、勤勉、
 正直、といった要素を強調している。グリニョーフが士官の道に入
 った事情などは、生まれる前からつてを頼んで「入隊登籍／賜暇」
 のかたちにしてあったことは無視し、

親父はさえぎった、「もう隊へ入れてもいい時分だ。下女部屋
 を駆けずり回ったり、(略)するのはもうたくさんだ。」(神西訳)

苟モ軍人トナルヲ得バ富貴尊榮此ニ過ルハナク

告テ曰クスミスノ年齢既ニ婚冠シ仕官セシムルニ足レリト(高
 須訳)

と、巧みに明治的立志勤行の従軍につくりかえている。

なぜプーシキンの作品中の人物名の一部をロシア語オリジナルか
 らの翻訳者が安易な英語名に置き換えたのか(父アンドレイ・ペト
 ローヴィチ・グリニョーフ、息子ピョートル・アンドレーヴィチ・グ

リニョーフの名を、父ジョン・グリ、息子ジョン・スミスと置き換
 えるなど、姓と名の明白な混乱もありいささかい加減。先に触れ
 たシカゴ版は、マリアを Marie、ピョートル Peter、アンドレイを
 Andrew とするなど、すべて同起源の英語名に置き換えてある。)、
 という点についての一つの答がこのあたりにあると言えないだろう
 か。

ロシア人の研究者 Manonov は、マリー、スミスという名をプー
 シキン懸恋の仏蘭西女性マリア スミット(一八一六年から一八一
 七年にかけてプーシキンによってリーダーと言う仮名で二篇の詩編に
 詠まれ、それらを捧げられたが彼女はそれを受け入れなかった。中
 山省三郎が『ロシア文学手帖』一九四三にこのエピソードを書き残
 している。)と関連づけ、高須はこの女性の名を踏まえたのだろう
 とほのめかし、日本人も後に中山省三郎の論文をよんだときには、
 高須訳の『花心蝶思録』を想起したろう、と言っている。こうした
 説はロマンチックであり日本最初のロシア文学者に対する思い入れ
 を満足させてくれる。しかし、文学的環境を考えてみる必要がある
 かも知れないが、当時高須治助にそれだけの予備知識があったとは
 思われず、此の問題については、柳田泉が、当時のイギリス熱を反
 映して校閲者服部撫松が手を入れたのだらうと言っているのが残念
 ながら妥当だと思われる。

高須治助は、日本で初めてロシア語を学んだ少数の一人であるに
 もかかわらず、その後ロシア文学の訳に携わった形跡はなく、三木
 愛花や宮崎夢柳などと共訳で英語などからいくつかの出版があるに
 とどまる。その三木愛花は柳田泉の照会に答えて「(高須は)江戸
 っ子だけに、同志の小酌でもある折は端唄なども歌い、一寸面白い

人物であったが、何分女性的な人で小官吏で甘んじ、文学などは廃したので、その後文筆方面の友人たちとは交通を絶った。」と語った。

本人に文学への志薄く、プーシキンの一代代表作に訳筆を付けながら⁽¹⁰⁾ 十全な理解を示すことができず、日本の読者の慣れつつあったイギリス風家庭小説の型に流れてしまった、といえるのではないか。ロシア文学に日本人の目が向くのは何と言っても日露戦争前後になつてからで、早い試みにすぎたといえるかもしれない。

日露戦中明治三七（一九〇四）年に、此の作品は、「士官の娘」と言う題で徳田秋声、足立北鷗⁽¹¹⁾ によつて再度訳出されている。（このときは登場人物名はロシアのものである。）

二、ロシア文学重訳時代

「大尉の娘」は、明治三十七年に再度訳出された。今度は重訳である。

既に、抄訳とはいえ原語訳が行われてから、二十一年も経つてから重訳が出版されると言うのは奇妙なことに思われる。

江川卓氏は、日本に於けるロシア文学の魅力の先行と、ロシア語人材の絶対数の不足とを重訳の横行の「常識的な答え」として挙げている。つまりは、当時の日本の趨勢として、英語の広く厚い層が形成されつつあるに対し、ロシア語を知る者は乏しかったということである。が、本稿では、一方で英語圏を通じ英訳で日本に流れ込んでいたロシア文学の影響⁽¹²⁾ がロシア原語からより遙かに豊かで時期的にもしばしば早い、原語訳より質の高い重訳が有意に多い、と

いう現象について改めてもう少し詳しく考えてみたいのである。重訳を除こうとすれば日本のロシア文学移入史は確かに可なり精彩を欠くものになるだろう。

ロシア語のロシア文学移入の経路はロシア正教ニコライ神学校と東京外国語学校露語科とにほぼ限られていた。

まずニコライの方を概観する。

昇曙夢の回想「研究と翻訳の五十年」（『ロシア文学研究』第三集、昭和二三）によれば、ニコライ大主教自身、文学の愛好者で、特にゴーゴリ、ドストエフスキイを読むことを勧めた。教会には三階建ての図書館があつて、二階が宗教書、三階が文学書で、大正期には十九世紀ロシア文学の殆ど総ての作品が備えられていた（関東大震災で三階が焼失し文学書の総てが烏有に帰したという）。その中から残月庵（石川喜三郎）の「脚本偽せ皇子」（プーシキン「ボリス・ゴドノフ」の完訳）訳出（明二六・九一―二八・二二）、瀬沼夏葉のチェーホフ初訳、等の原語訳が生まれた。また、明治二六（一八九四）年から正教会は雑誌『心海』『裏錦』を発行、ロシアの雑誌から多くの記事を翻訳紹介するようになった。また、正教を学ぶ目的で本国ロシアに留学派遣された者がいたことは、ことにトルストイとの直接交流につながり、小西増太郎の「クロイツェル・ソナタ」ほか翻訳、瀬沼恪三郎の助力による夏葉の「アンナ・カレニナ」翻訳、など多くの実を結んだ。（後にトルストイがロシア正教会から破門されるとこうした交流は日本側から打ちきられた。）

問題は、書き手読み手ともに正教内の限られた人たちで一般の普及に結びつく面が少なかったということであろう。

また、神学校、女学校では文学の教授はなく、（東北北海道を中心に）信者の子弟が送られてきていたこともあって、訳者達の文学的素養は幼かった。そのためかその翻訳の評価は原語訳だとはいい条軍配が上げられるとは限らなかった。

瀬沼夏葉が明治三十五年⁽¹³⁾、チエホフを訳しはじめたことは前校で述べたが、明治三十九年、「六号室」の、夏葉訳が『文芸界』四月号に、馬場孤蝶の英訳からの重訳が『芸苑』一―六月号に、発表されて鉢合わせとなった。このとき、孤蝶が自分の翻訳の最終回末尾に「省略無き唯一の翻訳」と附記したことが発端で、『文芸世界』時評子が、英語からの重訳が原語訳に比べて優れていると主張するのはおかしい、とかみついで論争となっている。更に下って、大正二年には、「桜の園」につき、夏葉訳のほか伊藤六郎訳と中谷徳太郎訳（重訳。「さくら畑」）、三編も出揃った。流石に珍しい符合で、比較論評も試みられた。

原語訳と重訳の比較になるはずのこれらの機会であったが、夏葉訳には「省略の箇所甚多きを以て、読者の疑惑を生せむを虞れ」と胡蝶は反駁し⁽¹⁴⁾、時評子もそれは一応認めざるを得ず、

・英訳そのものが、已に原文を省略・もしくは原文にないことまでも書き加へてあったとすれば、馬場氏の重訳は（略）骨折損の草臥儲けだ

などという地点まで後退し、文体論、或いは西欧語間の比較といった問題に発展しなかった。

外語の方はどうであったか。

二葉亭は外国語学校の図書館から借り出して、ドストエフスキイ『罪と罰』、ツルゲエネフの『ルウヂン』や『父と子』、ゴンチャロフ『オプロオモフ』、『断崖』、プウシキン『オネエギン』、レエルモントフ『現代の英雄』、トルストイ『戦争と平和』などを読破したとつたえられる。しかし、北岡誠司「二葉亭とロシア文学―小説観を中心」に（角川版近代文学鑑賞講座第一巻『二葉亭四迷』所収）によれば、二葉亭が在学していた頃の外国語学校⁽¹⁵⁾の図書館が所蔵していたロシア語関係の本は総てで三百点足らず、冊数で二千余。語学文学関係は三分の一以上、文学五十点余（百三十冊余）。ペ・ポレヴォイ編『ロシア語撰文読本』は図書館に六十四冊蔵。中心は教科書用のアンソロジーだった。

二葉亭自身の蔵書は、現在、和漢書十部五十六冊が早大演劇博物館に、洋書五十九部八十二冊が早大図書館に保管（坪内逍遙によって寄贈）されている。（この目録は「故長谷川二葉亭氏早稲田大学図書館寄託書目録」として岩波版九卷全集第九卷三二六―三二二頁に所収。）これらの本は、『ノーヴォエ、ヴレーミヤ書店図書目録』（多数のアンダーライン、書き込みのある一九〇二年のものが残っている。）によって、二葉亭がロシアから直接注文によって個人的に入手したものであった。⁽¹⁶⁾

東京外国語学校は英語を知らないで官学に進むことの出来る当時唯一の窓口であった。そこに進学したものは強い官界実業界への執着を持っていたことは、寧ろ皮肉にも、やむなく文学を生業としたがあくまで文学者たるを認めたがらなかった二葉亭の行き方が端的に物語る。その出身者は、日露戦争前後のロシア語需要が増える中、

実業で立ったものが多い。

二葉亭の翻訳はロシア文学の独自の魅力を文学青年達に知らしめ、続く翻訳紹介を渴望させたが、二葉亭が生涯に訳出した作品は微々たる数で、また、中・長編を翻訳しなかったことで到底需要を満たすものとはなり得なかった。

一般向けに開かれた供給先であった洋書取り次ぎ店丸善の店頭にはロシアものは極めて限られていたようである。丸善の月刊広告誌『学の燈』第七号は、「JUST ARRIVED」と言う一頁広告で「今般魯語初学者ニ適切ナル読本文典説話習字本等魯国ヨリ直輸入致候間御購読ノ程奉願上候」として、アンソロジー、文典、教科書類の到着を報じ、次の第八号（明治三〇年一〇月）に SOME RUSSIAN BOOKSとして、新入荷の十種のロシア語文献⁽¹⁷⁾が広告されており、これが予告の本体であることは、内容から明らかである。「直輸入」であることは興味深い、あげられた書誌は、ロシアの初等教育教科書や幼年向け寓話集に限られている。其処に高須の袖珍字彙も広告されている。

それとは比べものにならないほど、英米の書籍は、丸善等を通じて、広範且つ大量に流入した。⁽¹⁸⁾ 『丸善社史』(幸田成友、昭二六)や『丸善外史』(木村毅、昭四四、丸善)にその創立事情が詳しいが、丸善創立者早矢有的は天保八年の生れ、元来オランダ医者であったが、慶応三年築地の鉄砲州にあった慶應義塾に入つて自分の商才を発見し、明治改元とともに丸善を創業した。(横浜新浜町に店を開いたのが明治元年十一月)。屋号を丸屋として最初に商

つたのは教科書の大量輸入であった。というのも、福沢諭吉の直接の影響である。福沢は緒方塾でオランダ語を勉強したときの不便が身に沁みていたので、慶応三年二度目にアメリカへ行つたとき、教科書を大量に仕入れてきた。それに倣つたのである。⁽¹⁹⁾ 舶来の教科書は決して廉価ではなかったため、次にはその翻刻を行うことになり、そして出版も手がけるようになった。⁽²⁰⁾

上記の事情から、丸善は主にイギリスアメリカの書肆と強い結びつきをもち、ロシア文学もヨーロッパ経由で入ってきた。しかも、わずかなロシアの本をわずかな訳者が訳出する必要などさらにないほど英訳は日本に大量に入ってきたのである。

一例として、ツルゲネフの「煙」の場合を挙げる。「煙」を国木田独歩が明治三〇年頃にはしきりと愛読していたことが左のように自他の記録に残っている。

『暴風雨』は親友今井某を主人公とせるものなり。稀代の才人なりしが、惜しむべし麻痺狂にかゝりて死す。(中略)罹病後余の為にツルゲネフなどを度々訳してくれられたれど、文辞殆んど意をなさず、何の事か一つも解らざりき。今井は独逸文学者なり。惜しむべき才人なりしよ。(国木田独歩『病床録』)

「スモーク」の一冊が机の上に置てある。…今井君が自分のため「スモーク」の第八章を語つてイリナがリトイノフへ送つた書状を読んだ時自分は涙が込みあげてきた。…(独歩日記「一句一節一章録」明治三〇年十一月十一日の頃)

K（国木田）は中でもツルゲネフが好きであった。其時分は容易に手に入れることの出来なかつた『烟』の英訳を一冊持つてゐて、：『本当にこの通りだ。"Smoke. Smoke."と言ふあたり何とも言はれない』と言つたり：（田山花袋『東京の三十年』）

この「烟」という作品は、明治三六（一九〇三）年に二葉亭が一四四枚程訳し、題名を「けむり物語」とすべきか或いは「皆空記」とすべきかと思案しながらも、遂に中絶してしまつたのであるが、独歩は既に読んでいたわけである。

花袋自身、二葉亭訳の「あひびき」を読んで以来、二葉亭の名の付いた作品は何でも読む一方、『国民之友』に載つた徳富蘆花の外国文学紹介、特に第七四号（明治二三・二・二三）の「魯国の小説および小説家」等に注目してロシア文学を研究していた。フランシス・ガーネットの、ロシア語からの直接訳になる The Novels of Ivan Turgenev（一八九四—一八九八、全二五巻）（いつから日本に入つて来たかは明らかではないが、現在国会図書館に蔵せられているものは明治三三（一九〇〇）年の購求）が発刊されると明治三四年には「獵人日記」を読んでいる。「蒲団」のなかで、主人公竹中時雄が女弟子芳子に勧めて買させたのが「ガーネット女史のツルゲ—ネフ全集」である。

そうした人が花袋だけではなかつたことはガーネット版を底本に多くの訳が堰を切つたように出たことである。⁽²¹⁾ そのためしばしば初出の年代ははなれた同一作品が数人によつて同時に訳出された。

こうして英米を通じて紹介されたロシア文学は、しばしば優れた評論とともに入つてきた点に特色が見られる。例えばトルストイは、ロマンランらヨーロッパの知識人の目でいったん総括されたものが入つて来た。⁽²²⁾ 又個別の作品が編年的に流れ込んでくるのではなく、ある傾向に纏まつたものはいつてくるという特質もある。例えば先にみたように、初期にはヨーロッパが虚無党に怯えていたため、ロシア虚無党に関する実録および創作が多かつた。⁽²³⁾

これは、長短があるが、大陸の情勢と初めて接触する日本の知識人にとっては、理解を深める助けとして働いたのではないかと思う。逆に英語を知らない例えばニコライ神学校出身の訳者は作品論作家論において丸善型知識人になかなかつた。

ヨーロッパの文学論の蓄積を背景に、例えば鷗外の自信は、左のように、常に強かつたのである。

此の節：誤訳の穿鑿が喧しく言はれるやうだが、それがアンドレーフなどの露文学に劃^なられてゐるのは可笑しい訳だ。：今の文壇に露語の読める人があつて、縦^よし作品の内容が奥底から味へなくとも、原作と対照して所々の訳文の誤りを見出す事が出来る、其処に起因してゐると思ふ。（鷗外『文章世界』明治四十二年十月。『無名通信』の「心」誤訳指摘に関連して。）

考えてみれば、重訳が併存した時代というのは重訳者の方には、鷗外（「鰐」「馬鹿な男」）、魯庵（「罪と罰」「復活」）を筆頭に、相馬御風（「アンナ・カレーニナ」大二）、武林夢想庵（「サーニン」大二）、谷崎精二（「赤い花」大三）、森田草平（「悪霊」大四）「死せ

る魂」大六)、広津和郎(『チエーホフ作品集』八篇、大五)、など、作家としての創作活動で知られる人が多くいた。それに伴い作品論作家論(広津和郎の「怒れるチエホフ」など)も豊かであるし、ロシア文学の影響下に生まれた文学も又目を引くものがあつた⁽²⁴⁾。

それに対して、ロシア語からの訳を行った直訳者中では、二葉亭以外には只の一人も創作を発表していない。これは考えるべきだろう。

三、重訳の文体

小山内薫は翻訳の「小引」で、自分の訳を、英訳・仏訳を参照して、自家の取舍を加えた重訳であると断つて、

英吉利訳よりは詳しい、仏蘭西訳よりは粗である。英吉利訳に無くて、仏蘭西訳に有る部分も悉くは取り入れなかつた。(略)章の切り方も英吉利訳は十八、仏蘭西訳は廿一である。私は自分の考で、二十に分けた。節の切り方、点線の使い方は、殆ど総て、仏蘭西訳に従つた

と説明している。

前田晃は『短篇十種 チエエホフ集』(大正二、博文館)例言に

英訳からは極めて忠実に、殆ど逐字訳を試みた。意味ばかりを考へてこれに重きを置くと、或は原文を全くこはすことになりはせぬかと恐れたからである。最もそれにはロシア語に堪能な友人

に依頼して、『家で』『牧笛』『ジイノチカ』等の諸編の英訳を、ロシア語の原文と対照して見て貰つた結果、英訳が殆ど原作を直訳してゐることを知り得たからでもあつた。(中略)訳文は、訳者がチエエホフの味ひと信じたものをできるだけ正確に伝へやうとしたところに重きをおいて、多少の苦心をした。

と述べた。

前田晃の例言などは二葉亭の「余が翻訳の苦心」(前田晃が記者として明治三十七年前後に談話筆記したもの。)と、ほとんど同じことを同じ言い回しを使って述べている。⁽²⁵⁾二葉亭が原語訳をやつてきた現場の様子をよく知りその直接の影響で逐字訳を重んじたということになる。

ともに、欧文のスタイル、作品の構成という、文体上の厳密さを考へて翻訳に携わつた例である。しかし、共に直接訳でなく重訳の場合である点をさして重要視していないところが興味深い。

日本人はヨーロッパ言語間の差異を、日本語とヨーロッパ言語との差異に比べ比較にならないほど小さいと考へていたのだ。事実、明治初期には、重訳であつても原語訳であつても、逐語的に訳す、すなわち、和漢の小説のスタイルを離れ、文体を欧文に準じるという態度によつて、和文脈に存在しなかつたりズムや運びに日本語表現を与えるという共通の方向に進む結果となつていつたと言えよう。

四、まとめ

原語訳の出来る人は、その国の実態(風土、風俗、歴史)を相対的

によく知っており、その結果として、作品の内部空間を作者の意図に近く把握することが出来るはずである。殊に日常食卓風景などの訳には、語学力以外の要素が大きい。訳者の力量が同程度ならば、少なくとも文学に限れば原語訳の方が遙かに出来は上になるはずであり、「噴飯もの」の訳は出来ないはずである。これも、作家と翻訳者と批評家がほぼ分化した今日、原語訳が常識化した当然の理由である。

しかし、大正初期までの日本文壇の雰囲気として、まず、文学者と言うより文壇人ならぬ語学者の訳業が蔑視される傾きもあつたようである、ということ是指摘されている。翻訳に必要な要素のうち当該語学の実用的知識の地位が相対的に低かつた、といつてもいい。

鵑外、逍遙、二葉亭・・・明治の文学者はみな、西洋文学の翻訳紹介、文学論の確立、日本語による創作、の三本を切り放すことのできない活動として同時に進展させて小説の形式と内容を模索していた。そうした時代には、翻訳は直接訳であるか重訳であるかよりも遙かに重要な問題を沢山抱えていたのではないだろうか。

西欧文学が移入される時、ある一言語を通じて行われる、日本の場合は近代型知識人は英語を通じて育成されたから英語で、英米文学以外は重訳でとりいれられた、というこの開化期の現象であるが、似たようなことは他の国でもあつた。中国では、西欧文学は日本語版を底本にして訳され知識層に知られた。「大尉の娘」の訳題も高須治助の考案した題(『花心蝶思録』『露国情史』スミス、マリー之伝)が踏襲された。これらの現象を並行して考えることでまた見えてくるものもあると思うが、本稿の範囲外とする。

付・重訳時代の終わり

少し時代が下って広津和郎の回想記「年月のあしおと」の記述を拾っていくと、重訳による翻訳が行われた様子、直接訳への移行がおこったこと、がひとりの人間の文学修行時代にはっきり捉えられていて便利なのでここに引用しておく。

広津和郎が早稲田の英文科に入学するのは明治四十三年、当時まだ早稲田に外国文学と言えば英文科しかなかった。

：当時のわれわれは、英文科に席を置きながら、関心はロシア文学やフランス文学にあり、学校で学んだ英語も、それによって英国の文学を読むということには役立てず、専ら英訳によってフランス文学やロシア文学を読みあさるために役立てた。(一〇五頁)

：序でに云うと、その頃は翻訳は言語によらなくとも、英訳からの重訳で世の中に通用したので、私はチェーホフやトルストイやモーパッサンを英訳から重訳して学校時代は学資の不足を補ったり、学校を出て、三、四年小説で生活ができるようになるまで生活費を稼いだりしたものであった。(一〇六頁)

：石橋(思案)さんはその主宰する『文芸倶楽部』にチェーホフやモーパッサンを載せてくれた。人物の名がカタカナでは読者に親しみがないというので、日本人名にしたり、又土地も日本の土地の名にしたりしたものである。⁽²⁶⁾(一一二六頁)

…当時（大正二年）モーパーサンの「女の一生」の英訳は、「ウーマンス・ライフ」という五十銭の仮綴本が、丸善や中西屋（これは神田にあり、後に丸善支店となった）の店頭で積んであった。（一四二頁）

…植竹書院の編集部には主任の鈴木悦の外、相馬泰三、秋庭俊彦、萩原朝彦等がいた。…仕事というのは、編集員一同分担でトルストイの「戦争と平和」を英語から重訳することであった。（二七一頁）

…（円本時代）「女の一生」の訳を一冊にして加えることになり、私は旧訳をフランス原文で訂正する必要性に迫られた。私はフランス語は一寸匂いを嗅いだ程度で（二八一頁）

そしてシリーズが改版されると原語訳への入れ替えがおこなわれた。

注

(1) 筆者が参照したのは国立国会図書館蔵本からの復刻本であるが、これと、ニヴァ誌の記者が見たものとは、挿し絵が合わない。マモノフの本の中に挿入してあるのは又ずれている。

ニヴァ誌の記者が見たというプーシキン博物館に保管されている初版と改版の同書には、

1) 邦文原文不明（マリア・イヴァーノヴナとグリニョフが、ゲラシムとその妻のいる場で別れを告げる）、

2) 女帝エカチリーナがマリーを宮内の上苑に延て椅子に倚りマリ踞いて巻物を捧げ候（マリア・イヴァーノヴナがエカチリーナ女帝に庭で請願を見せる）、

3) マリー敵軍に囚はれて病気づき臥房に横る（病の床のマリア・イヴァーノヴナの枕元のグリニョフ）、

4) スミス忠僕クリントンと俱に馬車に乗る（ベラゴルスク要塞に向かうグリニョフとプガチョフ）、
の四枚が紹介せられている。

マモノフは2) 3) 4) と

5) 船長ミローフの娘マリーとスミス相対話す（ミローフとマリーとスミス対話す）

の四枚を収録している。

そして、復刻本は2) 4) 5) と

6) 両親スミスを撫育す（スミスとスミスの両親）

の四枚を復刻している。中山省三郎はノーヴォエ・ヴレーミヤ誌が革命前に、『大尉の娘』の六枚の挿し絵が銅版で再版されたことを報告している（『ロシア文学手帖』一九四三、一一〇頁）。計六枚であることはほぼ確か

である。(此のロシア側保管の諸本を見ることを一九九九年のプーシキン学会に期待したい。)

- (2) 一八三〇—一八九二。ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキー等の作品の挿し絵も後に手がけた。ステペニャークラフチンスキー「地底のロシア」の邦訳「鬼啾啾」の有名な挿し絵「暗殺のあとネヴァに身を投げる女性」も彼の作品。

- (3) «В 1882 году русские и не подозревали, что в Токио, на книжном рынке, впервые появился тщательно сделанный перевод „Капитанской дочки“ Пушкина на японский язык, да еще вдобавок украшенный иллострациями. И какими иллострациями! (中略) Екатерина у него с лицом настоящей ужомглазой японки; Гринев в генеральском мундире с лентой через плечо, Пугачев, там, где он едет с Савельичем в Белогорскую крепость, изображен с стриженной и курчавой головой негра. Художник не задумывается ни над чем: ни над лицами, ни над костюмами.»

- (4) 一九三三年に、ペテルブルク帝国大学東洋学部日本学科の第一期専攻者のひとりコンラッドが論文中(「一七八」)で「英語からの訳であり、マリアはマリーに、グリニョフはスミスになっている。」と報告し、ロシア人は初めて古典の主人公達が無慚にも名前を変えられていることを知り、今さらに驚くことになる。(重訳説についてはコンラッドは日本の研究者の説を踏襲したと思われる。)

- (5) 柳田自身が訂正するまで柳田泉『明治期翻訳文学の研究』など、日本の基本的参考文献とされるものは、すべて重訳、としていた。
高須治助のロシア語関係著作

『露和袖珍会話』明治二十四年

『露和袖珍字彙』(明治二十九年)

『露和語学初歩』(明治二十八年)。

- (7) 明治三〇年三月に第一号が出た。洋書の輸入の中心にあった丸善が出していた月刊社誌であるからその記事によって日本の西洋文化との接触記録がたどれるという意味で貴重である。明治始めの二〇年ほど存在していなかったのは惜しまれる。のち「学燈」さらに「学鑑」と改題された。虚無党にテーマをとった翻訳文学は、例えば柳田泉の調査によってあげれば左ようになる。

(8) 明治一四『魯国の烈女ヴェラ・サシユリツチ札問の記』『西国烈女伝』【魯帝弑逆記】

明治一五『魯国奇聞 烈女之疑獄』『冤枉乃鞭笞』『虚無党退治奇談』(川島忠之助がポール・ヴェルニエの『シャス・オウ・ニヒリスト』を訳述したもの)『露国虚無党事情』

明治一六『クロボキン侯伝』『一滴千金憂世乃涕淚』

明治一七『魯国虚無党秘録』『露国安那物語』『虚無党実記 鬼啾啾』

明治一九『通俗虚無党形氣』。

明治二二年(一八七九)一〇月二八日付『朝野新聞』に載った左の論説「魯国虚無党ノ景況」が最も古いツルゲーネフ紹介であろう(中山省三郎『露西亜文学手帖』参照)

抑モ魯国ノ社会党ニ向フテ無信心又ハ破壊教ト云フ意味ヲ以テ「ニヒリスト」ノ名ヲ下ダセシハ実ニツウルグネフ氏ノ親子ト題スル小説ニ創マレリ

この「親子」(現在の定訳は「父と子」)を、訳した「虚無党形氣」が二

葉亭のツルゲーネフ翻訳を手掛けた始めてであった。ロシア文学に対する我邦の興味はここに集中していたのである。

(9) こういうロシア人の氣質が、私などにはたまらなく面白い。サヴェリエーヴィチ像は、ロシア文学に初めて描かれたロシア農民の真実の姿としてロシアで評価されている。ゴーゴリがこの作品を嘆賞したといわれるが、「死せる魂」でロシアの地主のいじましくも人間的な性質を描いてみせたゴーゴリが高く評価したのは理解できる。老将軍ミローノフ像も、トルストイが「これが本当の勇者だ」と感心したといわれるが、高須訳のような模範的将校では余り面白くなかったと思われる。

(10) 高須治助が露国第一の文学者の代表作を訳す(其ノ最モ人口ニ膾炙スル者ヲ擇ブ)、と序文に謳った点も私は評価したい。二葉亭でさえも、ツルゲーネフの諸作品を手掛けるうえで、最初は虚無党の題(「虚無党氣質」)のもとに「父と子」を訳し、続いては「あひびき」「めぐりあひ」というごく抒情的な掌編を示した。

(11) 大正二年には、読売新聞の主筆だった人物。教養は英語とフランス語。この翻訳は、Mamonov によれば集成堂でだされ、プーシキンスキードームに現物が保管されている。足立は序に露西亜語版の「大尉の娘」への序文を引用している、ということである。

(12) 一八八五年ニューオーリンズにいたラフカディオ・ハーンは新聞にヨーロッパ文学の紹介記事を書いていたが、「怖ろしい小説『罪と罰』」「トルストイの求道心」「外国におけるロシア文学」等の題でロシア文学とそのフランスへの移入について報告している。(来日は一八九〇年、明治三年) 東京大学でも、学生にトルストイを鼓吹したりロシア文学についての話はたびたびしていたという。

(13) 明治三十七年三月六日『読売新聞』日曜付録に剣南子が「露国文学の研究

とアントン・チェーホフ Anton Tchekhoff」という題で

チェーホフの作はわが文壇に未だ紹介せられざるが如し、但だ其人の声価の紹介せられたるものに、吾人の知る所にて一昨年

云々と書いている。夏葉による「写真帳」「月と人」の翻訳は三十五年であるが、彼女の訳業は単行本の発行までは広く知られていたとは見なすべきでないという一つの傍証である。

(14) 馬場胡蝶は、のち内田魯庵が「復活」を訳し、そののちやはりロシア語を知るものからのいわゆる「誤訳指摘」の集中攻撃を浴びたころ、「いろいろいわれるが、私はやはり内田大人の訳文でなければ食指が動かない」という意のことを発言している。文学的素養や感受の深さなどの方をとる、したがって、夏葉らの「生硬な」訳業を評価しない、ということについては確信的であり興味深い。

(15) 当時英語を知らずに官学に入る唯一の道が東京外国語学校であったが、その学問的レベルにおいて、到底エリート養成期間としては機能しきれなかった。

(明治九年の東京外国語学校入学心得)

本校ハ仏語学、独語学、魯語学、清語学ヲ教授スル所トス

(中略)

此校入学生ノ年齢ハ凡ソ満十四歳以上十八歳以下トス

此校入学生ハ小学科ヲ卒業セシ者トス

一方長谷川辰之助の入学した明治十四年には、東京英語学校において、

「入学試験の程度を従来よりも高むる」ことになり、入学試験科目も、英文解釈にスウィントン『万国史』と同程度の文章、英文法に語源、文章解剖、数学は算術と一次方程式終わりまでの代数、幾何、地理、和漢学に『日本外史』程度を課すようになっていた。つまり、東京外国語学校は、予備門の前身たる東京英語学校の生みの親でありながら、いつのまにか予備門が高等教育機関に発展したのに、依然として旧制中学程度の学校に留め置かれたままだったのである。

予備門の校舎は神田一ツ橋、現在の学士会館の敷地に建っていた。そして東京外国語学校は道路を距てて、いまの如水会館、一橋大学一ツ橋講堂の敷地にあつて向かいあつていた。東京英語学校が、東京大学の管轄下の予備門に発展し、さらに明治十八年八月、文部省の直轄になると、外国語学校の仏、独語二科が予備門へ移された。これは当該語学科の教員と学生ぐるみの移転であり、非常に露骨に明治の洋学の趨勢を思い知らされたことが思いやられる。

(16) 森林太郎も、ドイツ留学以後、ドイツの書肆から目録によって書物は直接送らせていたことは前稿に述べた。

(17) SOME RUSSIAN BOOKS.

Поливановъ Л.—Русская Хрестоматія.	1.30
———Краткій Учебникъ Русской Грамматикъ.75
Басни Крылова полное собраніе съ бѣрафией и примечаніями.	1.00
Дарганъ А.—Елка, подарокъ на рождество, часть первая Азбука.90
Ушинскій К.—Родное Слово для детей Младшаго возраста.45
Кирпичниковъ А. и Гиларъ Ф. Этимология. Русскаго Языка для	

ИЗДАНИЯ КЛАССОВЪ ГИМНАЗИИ.60
Гербачевъ В. С. Руководство къ Обученію Писанью.60
Полевой П. Учебная Русская Хрестоматія.	1.00
Такасу Э. Карманный Словарь Русско-Японскаго Языка.	1.60
Новый Карманный Русско-Англискій и Англиско-Русскій Словарь.	2.50

因みに明治四十三年版広告に名の挙がったロシア語辞典としては、左のものがある。

『露和袖珍字彙』明治二十九丸善正六位勲四等渡辺至序)
 『増訂 露和字彙』原本文部省編集局蔵版 故古川常一郎氏増訂(明治三六年増訂再版発行。一三〇二頁、収むる所の語数約二十万言。)

『日露字典』二橋謙編纂(明治三十七年。市川文吉氏の賛助を辱うした)
 『露和兵要辞典』小島泰次郎氏・井田孝平氏・儀我保太郎氏・椎名固底氏共編

『露英字典』アレキサンデルフ氏編纂 (Russian-English Dictionary of 訳。松本圭亮訳、鈴木於菟平八杉貞敏校閲)

(18) 丸善に関する明治の青年の回想は多い。幾つか挙げてみる。

ある日、私は丸善の二階に行った。そしていつものやうに、そこに備へられた大きな目次の書を借りてそれを翻してゐた。ふと、モウパッサンの『短編集』が十冊か十二冊、安いセリースで出版されてあるのを発見した。何とも言はず嬉しかった。私は金のことなど考へずによく注文した。(花袋「東京の三十年」)

あの男はあんな本を買っていったかと、見てみると、やがてそれが雑

誌に翻訳され、あるいは新説として紹介されることになる。(戸川秋骨「丸善回顧」)

- (19) 丸善外史によれば、パーレイの『万国史』一八七四年(明治七年)版に「本書の注文が遠い日本から、二百、四百、六百とくる」とあり、しまいは扉にMARTYAと印刷した本を作って送ってくるようになった。

(17) 丸善が洋書を但輸入しただけでなく、大量に輸入したことは日本の、英書を基礎にした近代化を大いに助けた。海軍兵学校の入学規則に「英語試験はナショナル読本・ユニオン読本第四程度」とあった。また、加藤弘之が大学総理当時(明治二〇年前後)「ナショナル第五読本が本当に読める者があれば、月給百円でやとう」と言ったというはなしもあり、丸善の輸入(のち出版)した英語の読本が教養の目安となった様子がわかる。

- (20) 新体詩抄や百科全書上中下と索引一卷、明治一六、七年のことである。(この百科全書は初め文部省が手がけ、明治七年から翻訳刊行にかかったもので、原書はWilliam and Robert Chamber, Information for the people)。

- (21) ガーネット版ツルゲーネフ全集の訳の影響と言われるものは多い。上田敏が明治三四年(一九〇二)刊行『みをつくし』に『散文詩』を訳出。田山花袋が明治三四年に『猿人日記』をガーネット版で読み、「目から鱗の落ちるようになって」明治三五年五月刊の「重右衛門の最後」を書いた(題名自体『猿人日記』中の“The End of Tchertophanov”に倣った)、など。

- (22) 明治の終わり頃、工学士でさうそうたる文芸批評家ぶりを示していた中沢臨川の「トルストイ論」が中央公論に載りだし、文壇声を揃えてひたすらに感心し、島崎藤村は、訳して西洋諸国に示したいとまで激賞した。ところが、間もなくそれは、ロマン・ローランの「トルストイ論」の焼

き直しであることを意地悪く暴いた者(安成貞雄)がいた。(「丸善外史」より)

- (23) ステプニヤーク(ロンドン)、メーチニコフ(ジュネーブで大山巖と会う。後東京)その他、亡命革命家達がヨーロッパをさまよい歩いており、それがヨーロッパの知識人の直接に見たロシア人であった。

- (24) ロシア文学潮流を意識的に紹介したのはロシア語の使い手とは必ずしも一致しない。例えば森田草平(東大英文科)はイプセン、ダヌンツイオ、アンドレーエフの独訳本を漱石に読ませたのも草平であった。

特に大正初年には左のようにドストエフスキーを集中的且つ多面的に翻訳紹介し、自分の創作活動の大きな源泉とした様子が見て取れるのが興味深い。

- 大三、二「メレジュコフスキー」「人及芸術家としてのトルストイ並びにドストエフスキー」(ドストエフスキー論。安倍能成と共訳。玄黄社)
 大四、一「ドストエフスキーの一面」(『読売新聞』)
 大四、四「決闘」(翻訳。『新公論』)
 大四、五「妻の帰宅」(小説。「悪鬼」(現在の定訳「悪霊」)から翻案。『新公論』)

- 大四、六「新しい女の二典型」(カラマゾフ論。『文章世界』)
 大四、七「悪霊の序」(『読売新聞』)
 大四、九「雲」(小説。「大都会の暗い片隅より」(「地下室の手記」の独訳名)からの「小学校の生徒がお手本を紙の下に敷いて其上からなぞって書いたやうな」翻案。『新小説』)
 大四、一〇「産婦」(小説。「憑かれたる人々」(「悪霊」)から翻案。『文章世界』)

(25) というより、口調がそのままである。二葉亭の談話筆記というより当時から前田晃が主導した可能性もある。

・といふのは、それが雑誌に載つたのを見て主人はひどく喜ばれたからである。(略)「この前田君といふ人は不思議な人だよ。僕のつまらない座談をりつばな文章にしてしまつたからね。」(前田晃の回想

「二葉亭主人の事」)

(26) 独歩は明治三五年にツルゲネフの「アンドレイ・コロソフ」を翻案して「非凡人」を書いた。作中人物は総て日本人名に替えられ、モスクワが京都に、ステツプ地方が九州に、ドイツ人の退職教師がアメリカ人宣教師に、百ルーブルは五百円にしている。

(かとう・ゆり)

参考文献

高須治助『露国奇聞 花心蝶思録』(雄松堂書店復刻再版昭和五七)

江川卓「重訳ロシア文学の場合」『翻訳』岩波書店。昭和五十七・六

国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』風間書房、昭和三十

四・九

講談社『日本近代文学大事典』昭和五十二 第二卷「高須治助」の項、第

4巻「日本近代文学にあたえたロシア文学の影響」の項

『亡命ロシア人の見た明治維新』講談社 昭和五十七

井桁貞敏「露和・和露字典の編纂」『露西亜学事始』日本エディタースク

ール出版部、昭和五十七

柳田泉「高須治助伝聞書」『愛書趣味』一九二八、第一号

安田保雄「ツルゲネフ」柳富子「チエーホフ」明治・大正の紹介・翻訳を中心に『欧米作家と日本近代文学』

榎原貴教『マイクロフィルム版国立国会図書館所蔵 明治期翻訳文学書全

集 目録二』ナグ書房 一九八八

岩波文庫『大尉の娘』神西清訳 昭和四五

岩波文庫『回想の明治維新』渡辺雅司 一九八七

中村光夫『二葉亭四迷伝』講談社 昭和四一

広津和郎『年月のあしおと』講談社 昭和四四

根岸正純『近代の文学四 森田草平の文学』桜楓社 昭和五一

前田晃『明治大正文学回想集成十一 明治大正の文学人』日本図書センタ

ー 一九八三

昇曙夢『研究と翻訳の五十年』『ロシア文学研究』第三集 昭和三三

北岡誠司『二葉亭とロシア文学』小説観を中心に『角川版近代文学鑑賞

講座第一巻 二葉亭四迷』角川書店

安田保雄『獵人日記』と近代日本文学(二)―田山花袋と島崎藤村―

Translation of Russian Literature in Meiji (5)
— Why Masha changed into Marie in Japanese Translation? —

Yuri Kato

The first translation of Russian literature from the original was made in 1883, (2years before the first translation of Futabatei,) by Takasu Jiske. But his translation from “Captain’s daughter”(Pushkin) did not leave any deep influence on the Japanese literature or culture. The auther finds some of the reasons, considering the circumstances in early Meiji.

key words: Captain’s daughter, Takasu Jisuke, double translation, Maruzen, Russian literature